

中小企業にとっての産学連携を探る
第1回「産学連携オープンセミナー」を開催

中小企業にとっての産学連携を探る 第1回「産学連携オープンセミナー」を開催

産学連携が注目を集めている中、KVBCでは大学の当事者をお招きして多角的な視点から、産学連携の現状や将来の可能性などについて語っていただく「産学連携オープンセミナー」を3回シリーズで開催します。9月28日に開催された第1回オープンセミナーでは、京都産業大学の位ノ花俊明リエゾンオフィス事務長をゲストスピーカーに迎え、産学連携に向けての思いなどを熱く語っていただきました。



●位ノ花俊明氏（いのはなとしあき）

関西大学商学部卒業後、京都産業大学で総務部、教務部、入試部、ニュージーランド学術交流事務所、経理部次長などを歴任。平成15年よりリエゾンオフィス事務長、平成16年より総合研究事務長を兼務。

※平成16年10月1日より、新たに坪田昌也様がリエゾンオフィス事務長に就任されました。

大学が持っている多様な知的財産を有効に活用

大学の本来の機能というのは、時代の最先端研究を行うことであり、そこで得られた成果を生かして優れた人材を育成することです。今、産学連携が注目を集めています。私たちは企業の皆さんに儲けてもらおうという気持ちで行っているのではなく、大学が培ってきた知的財産を社会に還元して、産業活性化や人材育成に結びつけようという“社会貢献”の視点で取り組んでいます。

では、企業の皆さんにとって、産学連携のメリットとはどのようなものでしょうか。まず、大学が持っているさまざまな能力や視点を導入できるということです。また、研究者だけでなく、学生たちを巻き込むことによって、若い人たちのニーズを企業経営の中に持ち込むことができます。2つ目は、外部資源を導入できるということです。大学には多様な研究設備や学術資料、最先端のノウハウ、情報が蓄積されています。産学連携を行うことで、そうした外部資源を効率よく使用できるようになります。3つ目は、一定の研究レベルを確保できるということです。他社の成功事例の真似をしても、必ずしもうまくいくとは限りません。研究開発の分野でも同じことが言えます。なぜ、大学の教員が定期的に海外に出かけるかという、これまでの失敗事例を学ぶためです。大切なことは、同じ過ちを繰り返さないことだと思います。

産学連携の目的を しっかりと認識すること

京都産業大学においても、特色のある産学連携を推進しています。例えば、工学部・生物工学科では、癌の免疫抑制機能を大企業と共同で研究しており、製薬品の開発まであと一歩のところまでできています。そのほか、理学部では発光ダイオードの素材開発やプロパンガスの利用研究、また社会化学系でも経済学部の教員とソフトウェア会社との産学連携で、家庭用の金融資金運用ソフトの開発などにも取り組んでいます。

このように、私たちはさまざまな産学連携を行っていますが、その最初のきっかけはリエゾンオフィスを訪ねていただくことから始まっています。私たちとの雑談の中から、「それならこの先生に…」ということで、産学連携が具体化した事例もあります。大学の教員は、決して事業化を目指して研究を行っているわけではありません。教員にすべてを任せて、そこから驚くような技術や商品が生まれて、爆発的に経済が活性化することなどはほとんどないでしょう。まず、産学連携で大学に期待することをできるだけ具体化していただきたいと思います。自分たちの商品や技術をどのようにしたいのか、あるいはどこに問題があるのか。例えば、他社に比べて技術的に劣っているのか、マーケティングに受け入れられていないのか…。どうすれば儲かるかという相談では連携はうまくいかないと思います。



経営者の“産”の視点が 地域・経済の活性化を生み出す



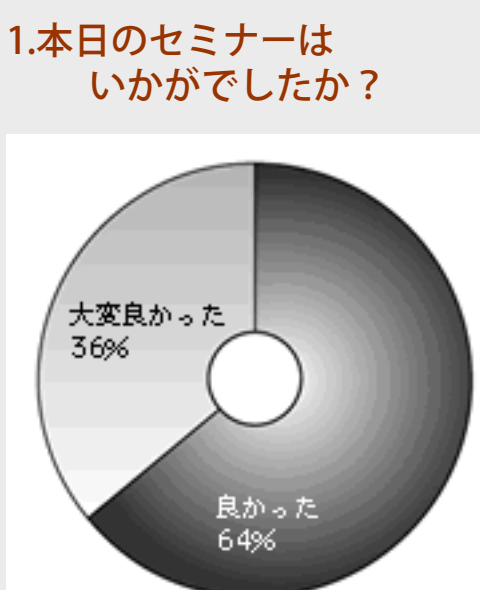
具体例を交えながら産学連携の現状を解説

大学をリサーチするときは、規模や知名度を基準にするのではなく、自分の会社のニーズに応じてくれる大学を選ぶ必要があります。規模は小さくても、非常に優れた知識やノウハウを持った研究者を抱えている大学もたくさんあります。ほとんどの大学が研究成果をまとめたシーズ集を用意しているほか、インターネットに研究内容や特色などを掲載しています。また、研究者のデータベースを一覧で掲載しているホームページもあります。まず、自分たちの目的にかなう大学をいくつか絞った上で、産学連携の窓口「こんなことを考えているんだけど」と電話なりメールを送っていただければ、必ず何らかのアクションが返ってくるはずです。企業の皆さんは、これまでさまざまな異業種交流や業界内の情報交換に取り組んでこられたと思います。大学を敷居の高い特別な存在ととらえずに、異業種の1つだと考えて気軽に足を運んでいただきたいと考えています。

大学の教員は研究者の視点しか持っていません。研究している課題が事業化できるかどうか、また会社にとってプラスになるかどうか、そこには経営者のセンスが求められます。本当に必要なのは、“産”の視点なのである。企業の経営者としての視点、大学が持っている知識、その社会的なニーズがうまく結びつくことにより、地域の活性化・新産業の創出を実現できると思います。これまでの取り組みの中で、少しずつ成果が表れつつあります。ぜひ、皆さまとともに、産学連携の芽を育てていきたいと思っています。本日はありがとうございました。

第1回KVBCオープンセミナー 参加者アンケート結果

1.本日のセミナーは いかがでしたか？



2.具体的に良かった点

- ・ 具体的な手続きや大学側のねらいを詳しく説明してもらい、分かりやすかった。
- ・ 安易な期待を抱かせない話で、参加者にとって非常に有益だった。
- ・ 大学は敷居が高いと思っていたが、身近に感じることができた。
- ・ 大学との付き合い方を理解することができた……など。

3.改善すべき点

- ・ レジユメが手元にあった方が良かった。
- ・ 具体的な事例をもっと知りたかった。

ますます大好評です！

第2回「The thirties KVBCメンバーズクラブ」開催報告！

去る9月15日、京都市健康保健組合保養所「きよみず」において、「The thirties KVBCメンバーズクラブ」が開催されました。第2回目となる今回の研修テーマは、「問題解決実践力を養成する（問題解決実践に強くなる）」。

KVBC会員企業から30代の幹部候補生14名の参加がありました。

講師の杉原潔氏（株）アポロ総合経営代表取締役から、問題解決の4原則（(1)事実を確認する、(2)問題を細分化する、(3)順番に実行していく、(4)広く深く考える）や、問題解決実践のための3つのアプローチ（(1)感情的アプローチ、(2)分析的アプローチ、(3)具体的即効的アプローチ）などについて説明が行われ、参加者同士のディスカッションを交えながら、諸問題を解決に導くさまざまなノウハウや技術について研修が進められました。



参加者の表情は真剣そのもの



講師の杉原潔氏

熱心に耳を傾ける参加者

